漢字が読めれば学びが変わる

～「漢字の読み優先指導」実践研究報告～

東近江市教育委員会事務局学校教育課
学力向上支援員　上野 芳樹

1　はじめに

３年前、次に紹介する母親の話がきっかけで本研究は始まった。

> 私の長男は小学校に入学したとき、全くひらがなが習得できませんでした。ノートにきれいに書いていたので覚えているものと思っていたのですが、本人は「文字」という認識が無く、読ませてみると全く読めなかったのです。そのとき、「『ひらがな』は単なる発音記号だから逆に難しいのだ。」と私は考えました。そして、「漢字には意味がある。だから、暮らしの中のエピソードを加えて漢字を教えれば覚えるかもしれない。」と思いました。
>
> １日１文字、その漢字で遊び、意味を教え、文を作り、それを読む。確実に読めるようになったら書く、という形で進めていきました。確実に読めるようになった漢字は、１～２回書く練習をすれば書けるようになりました。そして、６年間ですべての教育漢字を習得できました。
>
> 弟も兄と同じようにやりたいと言うので、同じやり方でやりました。弟は２年半ですべての教育漢字をマスターし、３年生頃から猛烈な勢いで読書をするようになりました。

今、学校で行われている漢字指導は、「漢字を書く」ことに力点が置かれ、反復練習中心の学習になっている。しかし、学習習慣の確立していない子や 発達障害のある子には苦行であり、習得も進まないという状況がある。漢字の未習得は読解力の弱さとなり、学習全般の不振に至る。読み書きの段階でつまずき、学校生活そのものへの不適応に至ってしまうケースさえある。

一方、この母親の取った「漢字の読み・意味理解」優先の指導は合理的で子どもの心理に即している。学ぶ力の弱い子も含め、すべての子が無理なく漢字を習得できる手立てとなり得るのではないか。それを実証してみたいというのが本研究に取り組む動機であった。

2　研究の仮説

母親の体験談に基づき、次の３つの研究仮説を立てた。

①「読み書き同時進行」より「漢字の読み優先」の学習の方が学びやすいのではないか。

・「読むこと」は「書くこと」に比べて負担が少ない。漢字学習の苦手な子も取り組みやすいのではないか。また、「読むこと」を優先させることにより、漢字の形や意味理解が進む。その上で書く練習に入る方が合理的なのではないか。

②上学年の漢字もルビ付き表記で表示していくことは、子どもたちの学びに有効なのではないか。

・例えば、「はつ明」と部分表記するのと「発明（はつめい）」とルビ付きで漢字表記にするのとでは、読みの難易度という点では全く変わらない。単語の意味把握という点では、ルビ付き漢字の方がむしろ優れている。また、低学年から上学年の漢字も見せていくことで、漢字の「読み」「形」「意味」が自然な形で学べていくのではないか。

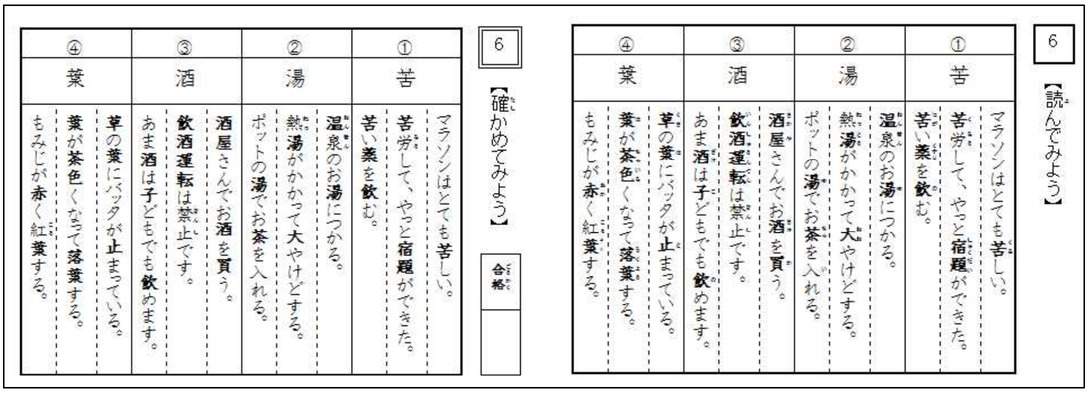
③漢字を読む力が育つことによって、文章を読む力・情報収集力が育つのではないか。

・ルビ付き漢字を読み慣れることで、漢字仮名交じり文への抵抗感が無くなり、読書への関心意欲が高まるのではないか。各種資料からの情報収集力も育つのではないか。

3　研究の方法

実証研究のための教材として「漢字音読名人」を作成した。

◆「漢字音読名人」


6
【確かめてみよう】
合格
① 苦
マラソンはとても苦しい。
苦労して、やっと宿題ができた。
苦い薬を飲む。
② 湯
温泉のお湯につかる。
熱湯がかかって大やけどする。
ポットの湯でお茶を入れる。
③ 酒
酒屋さんでお酒を買う。
飲酒運転は禁止です。
あま酒は子どもでも飲めます。
④ 葉
草の葉にバッタが止まっている。
葉が茶色くなって落葉する。
もみじが赤く紅葉する。

6
【読んでみよう】
① 苦
マラソンはとても苦しい。
苦労して、やっと宿題ができた。
苦い薬を飲む。
② 湯
温泉のお湯につかる。
熱湯がかかって大やけどする。
ポットの湯でお茶を入れる。
③ 酒
酒屋さんでお酒を買う。
飲酒運転は禁止です。
あま酒は子どもでも飲めます。
④ 葉
草の葉にバッタが止まっている。
葉が茶色くなって落葉する。
もみじが赤く紅葉する。

（3年生の「漢字音読名人」の例）

当該学年に配当されている漢字１字につき、音読み・訓読みの３例文、４つの漢字で１セットになっている。例文には当該学年より上学年の漢字や常用漢字も表記している。

すべての漢字にルビが振ってある「読んでみよう」編で音読練習し、当該学年までの漢字のルビを消した「確かめよう」編でチェックするという形になっている。

4　「漢字音読名人」の取組結果とその評価

(1)　平成28年度の取組

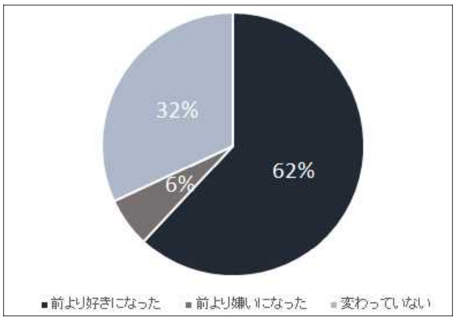
平成２７年度は、漢字ルビ付きテキストの試行を３校の３年生３学級で行い、その有効性を確認できた。その成果を受けて「漢字音読名人」を作成、平成２８年度２学期から３学期にかけて市内６校（８学級）・２通級教室で試行実践を行った。その概要を以下に記す。

①漢字に対する意識

～取組２ヶ月時点で行ったアンケート結果～

「漢字音読名人」をやる前と比べて、漢字に対する気持ちは変わりましたか

	前より好きになった	前より嫌いになった	変わっていない
合計（人）	132	13	68
％	62	6	32



「前より好きになった」と答えた子が全体では６０％を超えた。
「前より好きになった」理由を次のように書いている。

・前は漢字をぜんぜん読めなかったけど読めるようになった。自信がついたから。
・かん字音読名人をしたら、すごくまい日ならいたくなってすごくへんかしました。
・おとなになったきぶんがして好き。
・漢字がどんどんなれてきたから。　いろいろ漢字を見て勉強したから。練習したから。
・だんだんむずかしくなってきて楽しいから。むずかしいけどすきになれたから。
・前はひらがなで書いた方がかんたんだからひらがなでかいてたけど、音読名人をやってから、かん字でかくようになったから。等

②漢字の習得状況

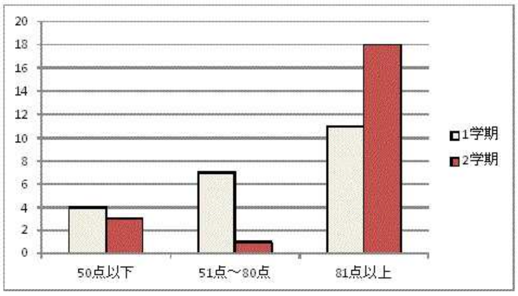
Ｂ小２年では、漢字音読名人から抽出した「漢字の読み５０問」の音読チェックプリントを作成し、子どもたちの漢字の読み習得状況を調べている。その結果、着実な伸びがみられた。

■「漢字の読み５０問テスト」平均正答数

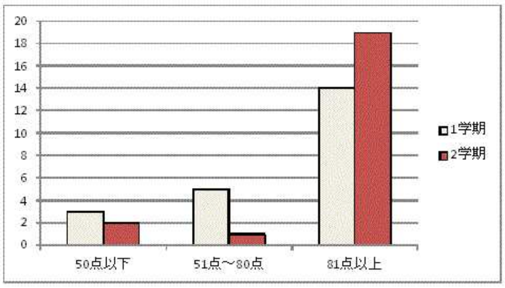
	８月３０日	１１月上旬	２月下旬
２－１(24 人)	１６．３	２７．０	３０．９
２－３(24 人)	２０．８	２６．９	３４．５

Ｄ小３年(22 人)では、漢字テスト(書き)の結果を１学期と２学期で比較している。

漢字小テスト14回分平均点



学期末まとめ漢字テスト結果



低位・中位の子どもたちが伸びている。特に中位の子どもたちの伸びが著しい。

学ぶ力の弱い子どもたちの変容について、Ｂ小２年からも次のような報告があった。

□漢字２５問(書き)テスト結果（取組前→３学期末）

Ａ児（外国籍）	１２→８０点	Ｄ児（外国籍）	４６→９２点
Ｂ児（外国籍）	２０→６８点	Ｅ児（外国籍）	７６→８８点
Ｃ児（低学力）	７４→９６点	Ｆ児（低学力）	６４→８８点

Ｂ・Ｄ小の取組は、「漢字音読名人」が、学習に苦手意識を持つ子どもたちも含め、どの子も学びやすいものになっていることを示している。
また、「『漢字が読めるようになったら書けるようになった。』と子どもが言っている」とＢ小担任は述べている。「漢字の読みに習熟すれば漢字を書く力も無理なく伸びる」ことも、これらの結果から読み取れるのではないだろうか。

③取組の波及効果

「漢字が読めるようになったことで子どもたちの姿に好ましい変化が見られた。」という報

告も３学期末交流会で受けた。

○漢字音読名人に取り組むようになってから、図書室へ行く頻度が増えて、楽しみながら分厚い本を読む子が増えた。（D小３年）
○子どもの生活の中に「読む」活動が増えたことで、読むことへの抵抗が少なくなってきている。総合的な学習や社会科の学習で図書室へ調べに行っても、今までは難しい文章だとすぐあきらめていたのが、じっくり文章と向き合う子どもの姿が多く見られた。（E小３年）
○［通級指導教室に通う児童］
・文章が読めるようになり、テストの理解力の得点が上がった。
・学習のまとめに自分の言葉で考えを書けるようになった。
・授業中、教師の話のメモを取るようになった。
・友達の輪が広がった。女の子にも話しかけるようになった。

(2) 平成29年度の取組

平成２８年度の取組から研究仮説を肯定する事実を得た。しかし、実践の規模が小さく、それを一般化するには弱い。より確かなデータを得るため、平成２９年度も「漢字音読名人」の取組を継続した。幸い、実践協力校が増え、市内７校３１学級（８３８名）で取り組まれるまでになった。２学期末に行った子ども・教師アンケートの集計結果を以下に記す。

■2学期末子どもアンケート結果

(1)漢字音読名人をやってみて、どうでしたか？

項目	とても楽しくやれた	まあまあ楽しくやれた	あまり楽しくなかった	つまらなかった
人数	405	315	89	29
%	48.3%	37.6%	10.6%	3.5%

「楽しくやれた」と肯定的評価をした子は全体の約８６％（７２０人）であり、「つまらなかった」と答えた子はわずかに３．５％（２９人）だった。
「楽しさ」の理由を記述欄から探ってみると、次の２点に集約できる。

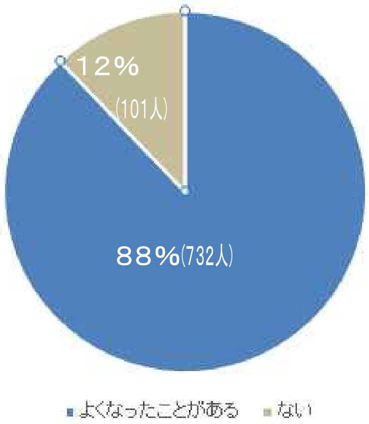
◎「平易さ」
取り組みやすく、成果が実感できたということを多くの子どもたちが書いている。

・どんどんかんじをおぼえられてはやくいえるから。（１年児）
・かんじをいっぱいおぼえられるし、クリアした時が楽しい。（４年児）
・１回目はふりがなありで、次からはふりがななしなので、すぐに覚えられる。（６年児）

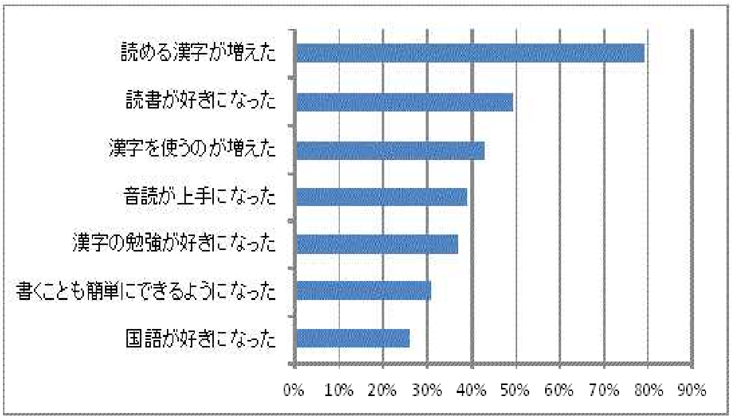
◎子ども同士の学び合い
友達と一緒にやれたことが楽しかったという回答が、高学年になるほど多く見られた。

・友だちといっしょにやってるから（３年児）
・みんなと聞きあって、漢字を楽しくおぼえられたから（５年児）
・人と人との関係が深まると思った（５年児）
・みんなに聞いてもらって仲がもっと深まったから（６年児）

（2)漢字音読名人をやって、良くなったと思うことがありますか？



■良くなったと思うところ(複数選択可)



「漢字音読名人」の取組によって「読書が好きになった」と回答する子が５０%いたことに注目したい。「漢字の読み」と「読書」の相関関係は、低学年で一層顕著に見られる。

２年（132名）	人数	%
読書が好きになった	79	59.8%

教師アンケートにも次のような記述がある。

・読書を進んでするようになった。漢字に興味をもち、習っていない漢字も読みたがるようになった気がする。
・迷路などの本を借りていた子が、文章が書いてある本を借りるようになった。
・読書などで読める字があると喜んでいた。

また、アンケート結果の「漢字を使うのが増えた（４３%）」も一定評価できる数値である。「漢字音読名人」を読み込む中で漢字仮名交じり文に慣れ、既習の漢字を使おうとする意識も高まったのではないかと推測する。漢字を抵抗なく使えるようにすることは、「漢字を書く」指導の目標でもある。その土台を耕しているということは言えるのではないか。

(3)　研究仮説の検証

平成２８・２９年度の実践結果を基に、研究仮説について次のように分析してみた。

①　「読み書き同時進行」より「漢字の読み優先」の学習の方が学びやすいのではないか。

子どもアンケートの集計結果や記述欄の声、指導した教師のコメント等から、「漢字の読み優先」学習は子どもたちにとって学びやすいということは確かに言えるのではないか。

また、平成２８年度の実践から、「漢字の読みに習熟することで無理なく書く力も伸びる」

という結果も得ている。「漢字の読み優先指導」の有効性は十分に示せているのではないか。

② **上学年の漢字もルビ付き表記で表示していくことは、子どもたちの学びに有効なのではないか。**

子どもたちは、上学年の漢字をルビ付き表記していることに全くこだわらず、むしろ難しい漢字を読めるようになることを素直に喜んでいる。知的好奇心を高めているという点で有効に働いている。この仮説も実証できたと言えるのではないか。

③ **漢字を読む力が育つことによって、文章を読む力・情報収集力が育つのではないか。**

子どもアンケート結果や指導した教師の観察から、子どもたちの読書への関心意欲が高まっていることも確かである。各小学校では、読書指導にも力を入れており、単純に「漢字音読名人」の成果とは言えないかもしれない。しかし、読書指導とこの取組を重ねることで、子どもたちの読書意欲が向上するということは言えるのではないか。

更に、「漢字音読名人」の取組によって、学ぶ力の弱い子どもたちが自信を取り戻し、級友との人間関係も開かれたものになっていったという事実が、２年間の取組の中でたくさん見られた。漢字の読み優先指導は、ユニバーサルデザイン教育の具体的実践としても評価できるのではないだろうか。

５　今後の課題

アンケート結果から「漢字音読名人」の課題も見えてきた。「覚えてもすぐ忘れる」という回答が３６％あり、少数ながら「漢字音読名人」の取組を拒否した子どもたちがいたということである。

その原因は、「漢字音読名人」の取組が「漢字の意味理解」の過程を欠落させていることにあると考える。意味理解を伴わない音読練習は、確かな理解とはなり得ず、学ぶ力の弱い子にとってはやはり苦行でしかないからである。冒頭の母親の場合、「漢字の意味理解」に最も重点を置き、その漢字のイメージ、生活のエピソードを重ねて読ませている。漢字の読み優先指導の中に意味理解の過程をどう組み込んでいくか。今後の実践で克服したい課題である。

また、この３年間の取組は、「漢字が読めること」に焦点を当てた取組であり、「書くこと」についての意識的な追求は弱かった。「漢字が読めれば漢字を書く力も無理なく育つ」ことは、これまでの実践から一定の成果を見ているが、より客観性あるものにするために、今後、漢字の『読み』から『書き』への具体的な実践研究が必要である。

６　終わりに

漢字指導のあり方について、新学習指導要領解説編には次のように書かれている。

> 当該学年より後の学年に配当されている漢字や，「学年別漢字配当表」に掲げられている漢字以外の漢字についても，振り仮名付きで提示することにより，読む機会を増やし，その漢字に慣れることで，児童の漢字の習得に資することが望まれる。また，必要以上に交ぜ書きをすることがなくなるため，語句の意味に対する児童の理解が一層促進されることが期待される。

「漢字音読名人」の取組は、まさに新学習指導要領の示すところに沿ったものである。そのことに確信を持ち、今後、更に多くの学校で実践の輪が広がることを心から願う。すべての子どもたちの学ぶ意欲と確かな学力を育むために。